

研究結果報告書

研究結果

本研究の目的は、植民地期の在朝日本人がアイデンティティを形成しつつ朝鮮人と日常的に接触した空間としての「学校」を背景として、在朝日本人と朝鮮人のお互いの文化変容の過程と存在意義を理解することにあつた。その為、1921年に設立された京城師範学校の活動状況と在学生・卒業生の人間関係を一つの研究対象に選んだ。

1920～30年代の京城のほとんどの小・中等教育機関は、日本人向け学校と朝鮮人向け学校に分かれていたが、京城師範学校だけは日本人と朝鮮人が一緒に修学できる教育機関であつた。

京城師範学校は、義務教育の拡充の担い手として教師/教員の育成を目的として設立された。初代校長・赤木萬二郎の努力と朝鮮総督府の全面的な支援に支えられ、設立当初から植民地朝鮮におけるトップクラスの教員養成機関であると同時にトップクラスの中等教育機関と位置づけられていた。従つて、多くの在朝日本人の二世とエリート層の朝鮮人が学ぶことになった。1930年代以降、京城師範学校にも様々な儀式や行事を通じて軍国主義的教育システムが導入されたものの、強いエリート意識を持った生徒たちは、朝鮮人と日本人の違いを超えて「サボン(師範)」という連帯意識のもとに学内外で活発なクラブ活動に専念した。例えば、「教育研究部」は1927年にペスタロッチ百年祭記念講演会を企画・開催し、その後、毎年講演会を開催した。「童話研究部」は京城の児童を対象に童話劇を上演した。また、「朝鮮語研究部」は朝鮮で最初の『方言集』を発行した。それ以外にも、「美術部」や「音楽部」からは数多くの朝鮮人芸術家を輩出している。

更には、「第二のペスタロッチ」になつて朝鮮の貧農の子供たちを救おうと云つた使命感を身に付けた彼らの多くは、教員という立場から朝鮮人としての使命を果たそうとした。彼らにとって、全ての朝鮮人が「教え子」だったのである。そうして、彼らは卒業後、教員として初等教育に従事する一方、農村の精神的・実践的指導者となつた者も少なからずいた。

以上が、本研究で明らかになつた事実の概要である。

一方では、京城師範学校の卒業生の卒業後の活動とそれに接した朝鮮人が受けた影響力が、植民地朝鮮における支配体制の中でどのように位置付けられるのかと云うことが、今後の研究課題として浮かび上がつてきた。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

1. 「재경성일본인의 정체성과 학교-1930년대 경성 사범 학교의 활동상을 중심으로」、車恩姫、2011年韓国文化人類学会下半期学術大会、2011年11月25～26日、西江大学金大建館。
2. 「在京城日本人のアイデンティティと学校」、車恩姫、第23回〈帝国と思想〉、2012年3月23～24日、早稲田大学戸山キャンパス39号館。

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)